
Popper Letters

ポパーレター：日本ポパー哲学研究会会報

1993

Vol. 5, No. 1

日本ポパー哲学研究会事務局
(1993年 5月号)

内容

ページ

第4回年次研究大会・会員総会のお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第4回年次研究大会（テーマ：社会科学におけるポパー哲学の応用可能性）に向けて

- | | | | |
|---|------------------------------------|-------|----|
| 1 | マーケティング論、Popper、そして方法の意義・・・・・・・・・・ | 堀越比呂志 | 3 |
| 2 | 社会科学の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 富塚嘉一 | 6 |
| 3 | 《歴史主義》批判の貧困・・・・・・・・・・・・・・・・ | 橋本 努 | 9 |
| 4 | 意図されざる帰結、開いた社会、市場・・・・・・・・ | 吉澤昌恭 | 14 |

論考

- | | | | |
|---|-----------------------------|------|----|
| 1 | ポパーと科学哲学・・・・・・・・・・・・・・・・ | 横山輝雄 | 16 |
| 2 | 「事実世界における価値の位置」について・・・・・・・・ | 杉田秀一 | 19 |

書評など

- | | | | |
|---|-------------------------------|------|----|
| 1 | 書評 小河原誠著 『討論的理性批判の冒険』・・・・・・・・ | 蔭山泰之 | 22 |
| 2 | 京都賞に関するアガシへの報告およびその返信（英文） | 立花希一 | 24 |
| 3 | ポパー推薦文より・・・・・・・・・・・・・・・・ | 嶋津 格 | 27 |

その他

- | | |
|---------------------------|----|
| 論文受領など・・・・・・・・・・・・・・・・ | 9 |
| 新入会者・退会者および住所変更など・・・・・・・・ | 18 |

第4回年次研究大会および会員総会開催のお知らせ

第4回年次研究大会および会員総会を下記の要領で開催することになりましたのでお知らせいたします。ご多用中とは存じますが、できるだけ多くの会員のご出席をたまわりたくご案内申し上げます。

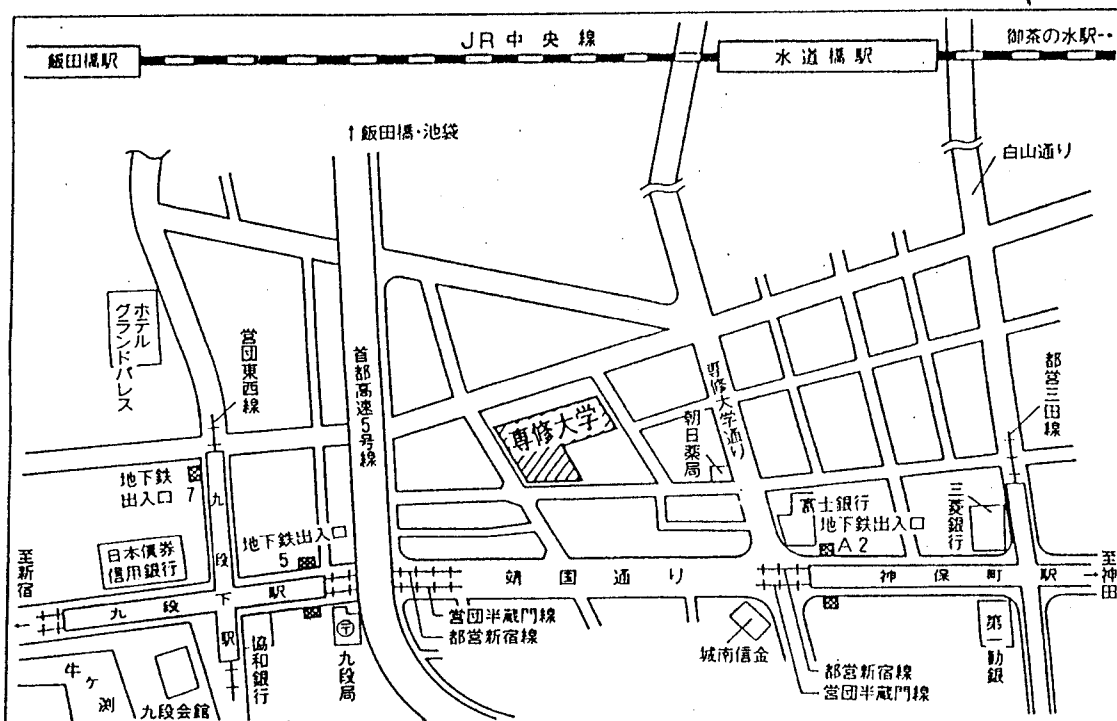
日時：6月26日(土) 10:00より
場所：専修大学神田校舎 12-A会議室 地図参照
会費：参加費 1000円 懇親会費 3000円程度

テーマ：社会科学におけるポパー哲学の応用可能性

スケジュール：

- 10:00~11:30 基調報告(竹内啓氏)
- 11:30~12:00 会員総会
- 12:00~13:00 昼休み(運営委員会ミーティング)
- 13:00~16:00 シンポジウム：社会科学におけるポパー哲学の応用可能性
報告(堀越比呂志、富塚嘉一、橋本努 吉沢昌恭 各氏)
およびパネル・ディスカッション(司会：萩原能久)
- 16:00~17:30 フリー・ディスカッション
- 18:00~ 懇親会

専修大学神田校舎案内図



- ☆ 地下鉄の出入口です。
- ☆ 案内の5・7・A2出口からだと専修大学へは5分以内です。
- ☆ JR水道橋からは約10分です。

千代田区神田神保町3-8 03-3265-6211

マーケティング論、Popper,
そして方法論の意義
堀越 比呂志 (青山学院大学)

I. マーケティング論における方法論研究

哲学者による科学的知識の性格づけの研究とは別に、諸々の個別科学内においても、現場の科学者達の間での方法論研究がなされてきている。そして、それは、①研究公表の際の方法の明示化、②自分の所属する学科を科学として承認させる、あるいは科学に高める、といった目的の為になされてきたと言ってよい。そして、②の目的のもとでは、哲学における研究成果が無意識的から意識的に、そして断片的から体系的に取り入れられてきたといえる。このような個別科学における方法論研究の展開状況を考えると、そこには、レベルⅠ：その学科で実際に行われている方法の表明としての方法論、レベルⅡ：断片的科学観あるいは特定の既存の学科の理論的構想のもとに展開される方法論、レベルⅢ：複数の科学観の間での哲学的論争の成果を導入した方法論、の3種類の方法論が存在し、レベルⅠからレベルⅢへと進展するにつれてその成熟度を増してくるといえるだろう。

マーケティング論においては、これまでに、①戦前におけるマーケティングを研究する上での3つのアプローチ(商品的アプローチ、制度的アプローチ、機能的アプローチ)の確認の時期、②1945年のConverseの論文以後1960年代中期にまで至るマーケティング・サイエンス論争の時期、③1969年のKotlerとLevyの共同論文に端を發し、1970年代において高まりをみせたマーケティング境界論争の時期、④1970年代中期に端を發し、主にHuntを中心に1980年代から今日に至るまで続いているマーケティング方法論論争の時期という、4つのメタ科学的論争の高まりが確認できるのであるが、ここにおいても、前述のようにレベルⅠからレベルⅢへの方法論研究の成熟化がうかがわれるのであり、

現段階である④は、いわゆる科学哲学の成果をベースとした本格的論争に突入してきている。

II. Popper哲学の応用可能性

ところで、このような現段階において、Popperの科学論はどの程度影響を与えているだろうか。結論からいうと、マーケティング論におけるその影響力は、今のところほとんどないといえる。すなわち、現在のところ、マーケティング論における方法論論争は、論理経験主義の支持者と相対主義の支持者の対立という形で進展してきており、この両極端の中間に位置すると思われるPopperやLakatosといった科学哲学者の吟味がほとんど抜け落ちているのである。これは、第1に、マーケティング論は、その発生において経済学では異端であったドイツ歴史学派および制度派のアプローチの影響を強く受けており、個々の事実から出発して理論を生み出していくという帰納的アプローチの重視という伝統から、科学哲学においてはもはや古い残骸といえる論理経験主義に固執しているためであり、第2に、この論争が本格化したのは1980年代であり、科学論ではKuhnの登場による地殻変動後に相対主義的科学観が新しい潮流となってきた時期で、この潮流が生み出されてきた論争経過を飛びこえて相対主義の無批判な受け入れがなされているためだと考えられる。

これに対し、学科の誕生も古く、逸早くレベルⅢの方法論研究が展開されてきている経済学においては、レベルⅢの方法論研究の突入がPopperの科学哲学の導入をきっかけになされ、その後Lakatosの科学哲学が大々的に導入されていくという形で進展してきた。Popperが経済学で初めて紹介されたのは1938年であり、現在では方法論研究も一段落した感があり、この間1985年には、「経済学におけるPopper派の遺産」という題で、経済学におけるPopperの科学論の成果に関するシンポジウムが開かれている。BlaugやHutchisonといった少数を除いて、大

多数の評価は、「様々な理由から経済学には本当に実質的なPopperの遺産は何らない」というものであった。すなわち、経済学者は、仮説演繹の方法を基に論理性を強調すると共に経験内容及び経験による反証テストも同様に強調するPopperの科学哲学に、経済学の科学生徒の証明と、経済学内におけるよりよい理論選択の基準を示してくれることを期待したのであるが、それに対する満足な解答が見い出せなかったと感じているのである。それどころか、むしろBlaugが述べたように、経済学者達は「無毒の反証主義」、(口先だけで反証主義を唱えるが免疫化戦略によりそれを実行しないこと)として批判にさらされることとなった。

Popperの科学論の経済学への導入の顛末がこのような理由には次の2つが考えられる。第1に、経済学者達が、Popperの科学論にインスタントな解答を求め過ぎていたということである。先ほどの経済学におけるPopperの遺産についての評価は、「Popperが説こうとした精神の批判的態度には当てはまらないが、良い科学の実践のために彼が提案した規則に言及するもの」であり、Popperの科学論のまさに哲学的部分についての影響が何らないといっているわけではない。それならば、Popperの批判的精神の哲学が経済学における具体的な境界設定と理論選択のルールとどのようにつながってくるかは、もともとPopperがインスタントに示してくれるものではなく、経済学者自身によって具体的な学説や理論研究の過程で提示した上でPopperの方法論との批判的対応を行なうプロセスをもう少し経てからでなければ判断できないと考える。それ故、この点で先ほどのシンポジウムの評価は早計にすぎるといえるだろう。しかしながら、Popperを支持するBlaugでさえ、「Popperは科学における理論選択に関しては常に曖昧だった」といっているように、Popperの科学論の中に問題がないわけではない。すなわち、前述の第1の理由よりもより根本的な第2の理由として、Popperの科学論における曖昧さ

や矛盾といった点が挙げられるであろう。その中でも特に、状況の論理、ゼロ方法といったPopperの社会科学方法論と彼の(自然)科学方法論との関連についての問題があげられる。Jarvie, Latsis, KoertgeそしてHandsなどが述べているように、Popper自身が社会科学と自然科学の方法論は基本的に同じであるといっているにもかかわらず、Popperの社会科学方法論の主張が「発見の論理」で展開された自然科学の方法論と矛盾しているように見えるという問題である。これは、合理性の原理の身分の問題であり、Popperが「合理性の原理は潜在的には反証可能すなわちそれを拒絶することを選択できるが、単にそう決定しないだけである」と述べる時、それはLakatos的ハードコア的なものとなっている。かつて、Popperが、Lakatosに対して、「私は、…『体系の真の核心』(もしくは理論の真の核心)、あるいは『最も基本的な諸仮設』というような曖昧な考え方を使わなかった。それと反対に、私は論駁の責を理論のどの部分に負わせるかはリスクを伴う推測の問題であることを指摘したのである」と批判しておきながら、社会科学の方法に関するPopperの発言は、よりLakatos的なものになっていると言わざるを得ない。そして、この社会科学方法論におけるPopperのLakatos的発言を経済学者がさらに都合よく解釈した結果が、前述の「無毒の反証主義」をもたらしたと思われる。

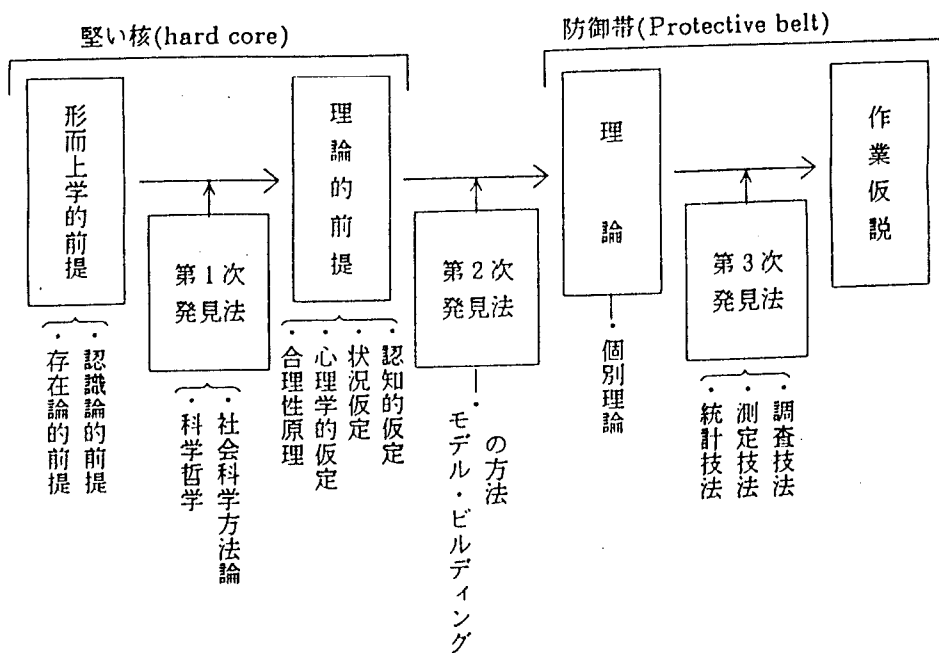
III. 個別科学における方法論研究の意義

前述のように、経済学者達の多くは、Popperの科学論が境界設定と理論選択において必ずしも明快な基準を提供したとは考えていないのであるが、この批判は何もPopperに対してだけのものではない。現在の科学哲学においてこの2つの問題に明快な答を出している者はいないからである。それ故、この2つの問題の解決を期待して現代科学論にとびついた個別科学における方法論者は、おかど違いだったといえる。そ

れならば、個別科学において現代科学論をベースにした方法論研究は無意味なのであろうか。そうではない。現段階における個別科学における方法論研究の目的と意義は、「科学性の認定」や「より良い理論の判定」というよりは、「学科の理解」にあると思われるのであり、その目的にとっては、規範的な科学哲学的側面を弱めた上で現代科学論の成果の導入は不可欠であると思われる。それは、学理解のための、理論構造のモデルあるいは科学史記述モデルの探索と精緻化の為に現代科学論の成果を導入し吟味していくという研究方向である。そして、よ

り具体的には、Popperが社会科学の方法論においてせざるをえなかったような、科学理論の階層的構造の明確化であり、LakatosのMSRPの科学史記述モデルとしての応用とその社会科学のための精緻化である。(そのささやかな試みとして、(図-1)をあげておく。)そして、このモデルをもとに、諸学説や諸理論の再構成、批判、修正を行うことにより「学科の理解」をめざす個別科学における方法論研究の進展は、逆に科学哲学の抱える曖昧性や問題点を明らかにし修正していく源動力になりうると考える。

〈図-1〉再構成の為の基本的図式



I 報告の前提として

1. 会計学方法論をめぐる問題状況

研究大会では会計学方法論に関する筆者自身の問題意識について触れる余裕がないかもしれないので、この場を借りて簡単に述べておきたい。

従来、会計学説における主張はある特定の会計方法や評価方法の正当性あるいは優位性を論証するという形が一般的であり、その際の主張の仕方は何らかの価値規範（真実性、有用性、公正性など）に訴えて「これこれの会計方法なり評価方法なりが望ましい」というものであった。

それに対して1960年代、70年代あたりからアメリカにおいて、特定の会計方法や評価方法の適否を規範的に論じても結局価値論争に陥り決め手を欠くので、視点を變えて、現実の企業がどのような方法を選び、そしてその理由はなぜなのかを解明しようという研究方向が展開され始めた。この主唱者達は、それ以前の研究方法を規範的でありそれゆえ非科学的であると批判した上で、自らの方法を実証的(positive)であり、それゆえ科学的方法であるとした。実際のところ、このアプローチがアメリカにおける会計研究の主流となり、「positive accounting theoryはドクタープログラムを乗っ取ってしまった」と皮肉られるまでになっている。

これに対して、規範的、非科学的として批判された論者達はさまざまな反論を試みてきたし、さらに解釈学的立場の論者も実証的アプローチのみを科学と見なす点を科学主義的として批判しており、ここに会計研究の課題あるいはその科学性をめぐる方法論の問題が提起されている。

この種の議論は、会計研究全体の中でみれば中心的なものとはいえないが、関連する論文の数からいえば最近少しずつ関心が高まりつつあるように思える。

ところで会計学方法論を考えるにあたって直面する困難は次の3つの段階に分けられる。

①科学方法論一般の問題：ポパー、クーン、ラカトシュ、ファイアーベントらの議論を経て科学方法論自体が動揺している。

②社会科学と自然科学の方法論：従来、科学方法論はどちらかといえば自然科学の方法論という性格が強くそれゆえ、ある方法論が一般的な承認を得たとしてもそれがそのまま社会科学に適用できるかどうかはなお議論がある。

③会計学固有の問題：研究対象としての会計が技術的、制度的、法律的な性格をもっているため、①及び②の検討結果がそのまま適用できるかどうかさらに検討する余地がある。

本報告は、②の領域に関するものであるがその前提として①に関して筆者の立場を簡単に述べておきたい。

2. 科学方法論・認識論一般についての考え方

現実の科学の活動はポパーの反証主義に従ってはいないといった不満から、クーンのパラダイム論、ラカトシュのMSRPそしてファイアーベントの方法論的アナキズムなどが提示されたが、この問題は方法論が現実の科学活動から離れてしまっているという指摘だけではなく、根本的にはポパーの方法論が反証を強調しすぎた点にあるのではないかと考えられる。確かに彼は反証も決定的なものではないと述べてはいるが、彼の方法論全体としては、知的探求は推測と反駁により偽なる知識を排除しつつ真理へ接近するという構想が描かれている。しかし反証も暫定的なものだとすれば、それに基づく次の理論展開が真理に一層近づいたという保証も確実ではないはずである。つまり「認識の進歩」も常に暫定的であり続けるはずなのである。

しかしこのことが直ちに懐疑主義をもたらすと考える必要はない。暫定的であるとはいえ、絶えずその時々々の知識の状態を前提にしてわれわれは知的探求を試みる他なく、その際にはま

さに推測と反駁の方法に依拠するのであり、このような方法を積極的に根拠づける認識論的立場として進化論的認識論がある。進化論的認識論によれば、われわれの知識はわれわれの視覚や聴覚と同様に周りの世界をとらえるための道具として発達してきたものであり、現在も進化の途上にある以上、その能力は視力、聴力同様に完全なものではない。

この立場から、(1)われわれの周りにはわれわれの存在から独立した実在的世界が存在すること(実在論)そして(2)われわれの知識は常に不完全であること(可謬論)が導かれる。この可謬論・実在論を前提とするときわれわれの知的探求は推測と反駁の方法によらざるを得ない。ただし反駁の確実性は導かれないので、理論の反証とは、その理論の拒絶を要請するものではなく、その時の知識の状態に不都合が生じたという警鐘と考えられ、その理論を救おうとする者にとっては何らかの合理的説明が要請されていることを意味し、また別の理論の探求に向かう者もこの反証例を新しい理論のなかで説明することが要請されていると考えられる。

「真理への接近」を確信することはできず、「認識進歩」は常に仮のものかもしれないが、実在をより良く理解することを目指して仮説を提示しそれをテストにかけるといふ活動が続けることが進化論の考えにもっとも良く適合する方法といえるであろう。

II 社会科学における認識と方法

つぎに今回報告するテーマである上記の②の領域の問題に移るが、詳細については検討中であるため、その骨子のみを紹介しておきたい。

1. 認識論的一元論と方法論的一元論

ポパーは「歴史主義の貧困」において、社会科学の方法と自然科学の方法とを比較検討し、社会科学の場合に実験の困難性など認められるにしてもそれは程度問題に過ぎず、基本的には両者の方法は仮説・演繹的方法という点で同一であると論じた。確かに上述の議論(I 2.)

から考えても、認識の対象が自然現象と社会現象とでその知識の在り方を異にするという理由は見当たらない。(このことを認識論的一元論と呼んでおくことにする。)

しかし社会科学においては、十分にコントロールされた実験の困難性、社会現象を動かす人間の学習能力あるいは自由性などは、仮説の反証テストの遂行を困難にさせる要因として無視できないほど重大であり、単に程度問題として片付けることはできないという指摘も多く見られる(これを方法論的二元論と呼ぶことにする)。ポパー自身も歴史予測の不可能性を指摘する論拠として、人間の知的活動における創発性を挙げている。かくして人間行動そしてその結果生ずる社会現象を予測することは原理的に不可能となり、このような事態は彼自身の方法論的一元論に抵触するようにも見える。

この問題を解くための手懸かりとしてポパー自身が「雲と時計」において取り組んだ非決定論をめぐる議論を参照してみたい。そこでの結論は、あらゆる現象は程度の差こそあれ非決定的(雲的)であるというものである。また彼の還暦論集の質疑応答の中でも、彼は因果的な説明を特殊ケースと捉えむしろ確率的説明が一般的であると述べている。確かに自然科学といっても、量子力学や生物学のように非決定性の強い分野があるし、社会科学においても困窮状態にある人々の経済行動およびそこから生じる経済現象(例えば価格の形成)はかなり決定論的であるが衣食住を満たした人々の消費行動およびそこから生じる経済現象は非決定的要素が強いであろう。従ってそれぞれの領域において、決定性の強い対象領域から決定性の弱い対象領域まで連続的に存在していると見る方が適切なものかもしれない。

このように考えるとすれば、対象領域の非決定性に応じて現象を確率的に捉えるという点において、社会科学と自然科学の方法論的一元論を唱えることができるといえる。ただしこの場合、確率命題のテスト可能性の問題、傾向性解

釈の問題など慎重に検討すべき課題がなお残されているように思われる。

2. 社会科学の課題

これまでの議論に従えば、社会科学の課題とは社会現象を説明し予測する理論を追求すべく推測と反駁を試みるということになる。その際、社会全体が何か見えない力によって自律的に変化するものと見るのではなく、あくまで社会を構成する個々人がそれぞれの置かれている状況に対処する結果としてある現象が生まれ、存続しあるいは消滅するという見地に立って理論を構成する方法論的個体主義的が採用される。

ところでポパーによるとここで注意すべき点は、このように個体主義を採用するとはいっても、社会現象の説明を個々人の心理的性向に還元しようとする心理主義に陥るのではなく、個々人の心理的性向は彼等を取り巻く社会的状況に大きく影響を受けるので、研究関心としてはむしろ社会現象そのものの説明に向けられることになる。つまり個々人の心理的性向の内容を分析するのではなく、むしろある特定の心的状態にある個人を想定した上で、ある社会現象を説明することが社会科学の課題とされるのである。しかし、前述のように個々人はある特定の状況に対してですら、異なる価値観を持ち異なる反応をしよう。このとき当の社会現象を説明しようとする理論は、そのような個々人の非決定性によって裏切られる可能性を秘めており、そのような個々人の自由性のゆえに当該理論で説明できない事例を厳格に反証にとらえると社会科学の理論はすべて簡単に反証されてしまうことにもなる。これに対処する一つの方法は、前節での結論に従って研究対象の非決定性を認めて確率命題をもって理論を構成するというものである。この場合には、あらかじめ非決定性の度合いを想定し仮説として明らかにしておき、その確率命題がテストされるという形になるであろう。

もう一つの方法は、理論をウェーバーのいう理想型あるいはポパーのいうゼロ座標として位

置付け、現実との乖離についてはその都度説明するというやり方であるが、この方法では理想型あるいはゼロ座標そのものは反証に晒されないで、前述した認識論的立場と一貫しなくなる。ただし、理想型あるいはゼロ座標そのものを徐々に修正して行くことができるかどうか、それが推測と反駁の方法に沿って行われようかどうか、を検討する価値があるかもしれない。

いずれにしても具体的なイメージがはっきりしないので、次に理論の具体例をあげながら検討してみたい。

3. 具体例による検討

冒頭で紹介したpositive accounting theoryは、その前提として企業経営者と株主あるいは債権者らとの関係をとらえるにあたり、agency theoryの考え方を採用している。これは、例えば財産を委託した株主をprincipal（主人）、財産を提供されその管理運用を任された経営者をagent（代理人）にとらえる。経営者は基本的には株主のために経営活動を行うが、株主が経営者の行動を逐一把握できないとすると、経営者が手を抜く（自分の効用を極大化する）可能性が存在する（モラルハザード）。これを制限するためには、例えば監査人による監査を依頼するか、経営者報酬を企業利益とリンクするような規程を設けることが考えられる。とくに後者のような報酬規程が設けられている企業の場合、経営者は利益数値に敏感になり、経営活動を通して利益を生み出すだけでなく、許容されるいくつかの会計方法のうちから利益を多く算出できるような方法を選択する傾向にあるという仮説が導かれる。規範的会計理論家があるべき会計の姿をいくら提唱しても、現実の企業はそれとは違った状況の中で「合理的」に意思決定しているので、このことを説明してゆかねばならないというのが、positive accounting theoryの方法論である。

さて本報告ではこの方法論を吟味することが目的ではなく、そこで前提とされているagency theoryを社会科学の一理論として考えた場合

に、どのような方法論的な取り扱い方ができるかという点を考えてみたい。※

※具体的内容および結論については目下検討中であり、研究大会までに整理して報告したいと思えます。当日は質問・意見・アドバイス等よろしくお願い致します。

論文受領など

編集部ではこの期間中にポパー研究に関連する下記の論文をそれぞれ著者から送っていただきました。

山田雄三

「価値多元論（ブルリズム）の考察 I」、同 寒蟬第六集『価値・自由・人間を考える』中央公論事業出版 所収

中才敏郎

「批判的合理主義と経験的基礎の問題」人文研究 大阪市立大学文学部紀要 1992年 第44巻第11分冊

なお前号に掲載のポパー研究文献目録は、機会があれば抜けているものを補充して、より完全なものにしたいと考えております。

その際に目録に載せるべき文献で、お気付きの文献がありましたら、お知らせいただければ幸いです。

〈歴史主義〉批判の貧困

橋本努（東京大学大学院）

ポパー哲学を社会科学に应用すべく、私はこれまで次の三つの方向を探ってきた：①進化論的認識論を社会理論に应用する可能性。②「〈歴史主義〉の貧困」におけるポパーの社会科学方法論を発展させる可能性。③「開かれた社会」の思想的基礎論を展開する可能性。これらのうち、①と③は確かに魅力的なテーマであるが、本稿では②を批判的に論じる。ポパーの社会科学方法論が〈歴史主義〉に劣らず貧困であること、したがってポパー哲学の応用可能性を考えるためにも、われわれはポパー以前の社会科学に一旦後退しなければならないこと、これらのことを確認することが先決だからである。

本稿は、しかしながら誌面の制約上、全面的にポパー批判を展開することはできない。したがって、以下では最初に結論を述べ、これを根拠づけるための議論の一部、すなわち、ポパー批判として最も重要な議論（〈歴史主義〉の規定と歴史発展の法則についての議論）のみを載せることにする。（全面的なポパー批判を、私は修士論文で試みた。）

1. ポパーの〈歴史主義〉批判に対する評価

ポパーは、〈歴史主義〉の方法論が実践的含意をもっていること、あるいは〈歴史主義〉の方法論がイデオロギーの道具となっていること、このことを批判するのではなく、むしろ〈歴史主義〉の方法論が実践的含意をもつことを高く評価しつつも、しかしその実践的含意が「貧しい」ものだ、と批判する。一般に、方法論が思想内容を含みもつことを「方法の思想負荷性」と呼ぶなら、ポパーは〈歴史主義〉の方法論を、その「思想負荷性」において批判したということが出来るだろう。“適切な社会科学方法論は、「思想負荷性を離脱」したのではなく、「正しい思想負荷性」をもったものである”——私は、ポパーの社会科学方法論のメッセージをこのように解釈している。

しかしポパーの〈歴史主義〉批判は、成功的ではない。それは俗に言われるように、「ポパーの反証

主義が成功していない以上、ポパーの《歴史主義》批判もだめだ」ということではない。社会科学におけるポパーは反証主義ではなく、状況の論理をハード・コアにすえた一種の研究プログラムを提案しているのである。しかし、果たしてこの研究プログラムが《歴史主義》（これは唯物史観などをハード・コアとしている）よりも優れているのかどうかについては、大いに議論の余地があるだろう。《歴史主義》方法論の批判に実地的な意味で成功するためには、論理内在的な批判に成功し、同時にまた、《歴史主義》に代替する魅力的な方法論（代替的プログラム）を提出しなければならないが、ポパーはこの二つの条件をクリアしていないように思われる。第一に、ポパーの《歴史主義》批判はその思想負荷性の批判にとどまり、論理内在的には成功していない。第二に、ポパーの研究プログラムは魅力的ではない。なぜなら、それは「自由主義思想をうまく負荷するような装置」ないし「自由社会を支える魅力的な知識を発見するための装置」たりえていないからである。

私は、思想に対して中立的な方法論（プログラム）は、それが他の方法論の思想負荷性を批判するという機能を果たす以外には、それほど価値のある知的営みであるとは思わない。これまで社会科学方法論が重視されてきたのは、それが思想闘争の最終的戦場であったからであり、もしも方法論が思想闘争と無関係になるなら、そのステイタスも変容せざるをえないだろう。思想中立的な方法論というものは、単に「知識を整理する道具」といった地位しかもたないと思う。だからもし、「科学の客観性は議論の公共性にある」としたポパーの社会科学方法論を、「思想中立的」という意味での「客観的」な方法の探求であると解釈するならば（確かにそのような解釈の余地はあるが）、それは誤っていると思う。真の問題はむしろ、「正しい思想について何らかの負荷性をもった、豊かな科学研究プログラムの方法とはどのようなものか」ということではないだろうか。私は、ポパーはこの問題に気づきつつも、『《歴史主義》の貧困』ではすぐれたプログラムを提出できていないのだと考える。状況の論理という研究プログラムは、確かに自由主義思想を負荷しているが、それは脆弱な「方法の思想負荷性」でしかない。

以上が私の結論である。

2. 《歴史主義》の性格規定

ここでは、ポパーは《歴史主義》の教義のすべてに反対しているわけではないこと、また、《歴史主義》という概念は相互に矛盾するような定義を含んでいることを指摘することで、ポパーの《歴史主義》批判の粗末さを整序する。

《歴史主義》の反自然主義的主張：(1)普遍法則の否定、(2)能動主義（人間の営みに介入しようとする使命感に訴える力）、(3)実験の否定、(4)新奇性の記述、(5)現実の錯綜性、(6)予測の不正確さ（エディプス効果）、(7)全体論と社会有機体論、(8)直観的了解、(9)数学的方法の否定、(10)方法論の本質主義。《歴史主義》の自然主義的主張：(11)理論的であり、かつ経験的であること、(12)大規模予測、(13)知識の経験的源泉、(14)社会的ダイナミクス、(15)歴史的発展の法則、(16)歴史的予言。

これらのうち、ポパーが批判しなかったものは、(2)(4)(6)(承認)(8)(9)(11)(12)、思想負荷性のみを批判したものは、(3)(7)、内在的に批判したものは、(1)(5)(10)(13)(14)(15)(16)であると解釈できる。

（ただしその理由は本稿では省略する。ここから分かることは、まず第一に、まともに批判された点は《歴史主義》の教義の半分程度であるということである。）

以上に確認したポパーの《歴史主義》は、別の観点から、次の六つの類型に分類できる。(1)期間《歴史主義》：それぞれの時代によって法則が異なるという相対主義。(2)予言《歴史主義》：歴史の法則に対する解釈を科学的に定式化していないもの。(3)予測《歴史主義》：予測が科学理論として定式化された推測である場合。(4)発展的《歴史主義》：全体が目的をもち、その自己運動によって歴史が展開するというテーゼ。(5)政治的《歴史主義》：社会科学における《歴史主義》から帰結する政治の役割についての主張。これはさらに三つに分けられる。(5a)社会工学が全く無力なケース、(5b)社会工学が部分的に有効なケース、(5c)社会工学が全面的に有効なケース（ユートピア工学）、(6)理解《歴史主義》：歴史の予知よりも理解を目標とする立場。

これらの類型は相互に両立不可能である場合が多いこと、本稿では差し当たって、このことに注意を促すに留め、ここからひとつ飛びにポパー批判の中心へと議論をすすめる。

3. 「歴史発展の法則」批判の貧困

本稿は論点を絞って、歴史発展の法則ないし予言について詳細に検討する。ポパーの主張は、以下に

挙げる五つの論拠によって論駁できる。

第一の論拠：進化法則について。「貧困」では、《歴史主義》の自然主義的主張として、進化論が挙げられている。しかしポパーによれば、進化論とのアナロジーによって普遍的な科学法則を導き出すことはできない。なぜなら生命および人間社会の進化は「ひとつのユニークな歴史的過程」であり、「その過程の叙述は、一つの法則ではなく、一つの特称的な歴史的言明であるにすぎない」からである。この主張に対して、ポパーは自ら、反対意見の可能性を二つ提示している：(a) 進化の過程がユニークなものであるという主張を否定すること。例えば同じ進化の過程がさまざまな社会において見いだされること。(b) 進化の過程がたとえユニークなものであっても、その中に一つの趨勢とか傾向、もしくは方向を識別できるのであり、その趨勢を述べた仮説を定式化し、その仮説を将来の経験によってテストすることができると主張すること。もしこれらのいずれかが支持されるなら、ポパーの主張は論駁されることになる。まず(a)について言えば、ポパーは歴史上の出来事のあいだにさまざまな類似の過程があることを認めるのだから、それだけで論駁されてしまうようにも思われる。しかしポパーは、その類似性によって歴史の趨勢を予言することはできない、という点に強調点をおいているのである。しかしこのことは、歴史的現象の類似性に基づいて歴史法則を「定式化」することを排除する論拠にはならないだろう。法則の定式化が可能であれば、(a)は原則として支持される。ところが定式化が不可能であるというのが、(b)に対するポパーの批判である。ポパーは歴史の「趨勢」は存在するがそれは「法則」ではない、と批判する。だが、この批判は混乱している。ポパーはここで、「存在」の問題と「仮説の定式化」の問題を混同しているのだ。ポパーの主張は、「ある趨勢の存在を主張する言明は、存在言明であって普遍法則ではない」というものである。しかしこの主張は、趨勢を一般的な仮説（普遍法則と初期条件）を用いて説明するという可能性を否定するものではない。ポパーは「数百年あるいは数千年も持続したある趨勢が、十年のうちに、あるいはもっと急速にさえ変わりうる」と述べ、歴史法則は「存在」しないと主張しているように受け止められる。だがこうした「存在」の問題は、すべてが「推測」であるというポパーの批判にさらされるだけである。推測であることを認識さえすれば、歴史法則は仮説として「定式化」可能である。したがって(b)に対するポパーの批判は論駁される。さらに重要なことは、進化論に対するポパー自身の見解が変化した、という事実である。次のポパーの言明は、われわれの考察にとって有利な論拠を提出している。「ダーウィンの理論は、一般化された歴史的説明である。このことは、

その状況がユニークなものではなく、類型的なものであることを意味する。したがって、状況の単純化されたモデルを構成することが時として可能である。」

第二の論拠：初期条件と法則の数について。ポパーは次のような問題が「決定的(crucial)」だと主張する。「もしも風が吹いてある樹がゆれ、ニュートンのリンゴが地に落ちたとすれば、それらの出来事が因果的諸法則によって叙述できることをだれも否定しないだろう。しかし、因果的に関連のあるさまざまな出来事が現実には、あるいは具体的に継起して生じたことを叙述するような、重力の法則といった単一の法則は存在しないのであり、またそれを叙述しようとする単一の明確な法則群でさえ存在しないのである。重力法則以外にも、われわれは、風圧とか、枝のぐいと動く運動とか、リンゴの軸内における張力、またはリンゴが蒙った外傷とかを説明する諸法則を顧慮しなければならないだろう。…いろいろな出来事が具体的につながって、つまり継起して生じることが、(振り子とか太陽系の運動のような例は別にして、) 何らかの一定の法則によって、あるいは何らかの明確に一群となった諸法則によって、叙述ないし説明できるという考えは、まったく誤っている。」さて、以上のポパーの主張は、何が言いたいのだろうか。ポパーは明らかに「歴史進化の法則」が存在しないことを証明したつもりでいるのだが、彼が示したことはむしろ、「完全に具体的な叙述」の不可能性であるにすぎないのではないだろうか。というのも、上のリンゴの例は、原理的にはニュートンの法則と初期条件が与えられれば説明できるが、ポパーはその「具体的な叙述」は不可能だと述べているからである。しかし原則としては、単一の歴史法則を仮説として定式化することは、リンゴの場合と同様、可能である。《歴史主義》の主張は、長期的予測が可能であるとしても、現象の細部までは予測できないというものだから、この点でポパーと《歴史主義》の間に対立はないだろう。ポパーはハイエクにならって、科学の説明が詳細な説明ではなくて「原理説明」に留まることを認めているのである。おそらくポパーは、次のように《歴史主義》を批判すべきであったろう。すなわち、歴史進化の法則は仮説として定式化できるとしても、社会現象は複雑であり、仮説の初期条件はさまざまな法則に依存して規定できない以上、説明および予測が不完全なものとして留まる、と。そしてこのことは、次の問題へとわれわれを導く。

第三の論拠：予測と予言について。上に引用した文章から分かるように、ポパーは社会現象は複雑であり、太陽系は単純である、と説く。ここで複雑／

単純の二分法は、初期条件の確定の困難／容易という二分法に対応すると同時に、動態／静態という二分法にも対応する。ポパーによれば、太陽系は静態（孤立化された・定常的・回帰的）であるから天文学は長期的予測が可能となるが、社会は動態なのでそれが不可能である。しかし、何が静態／動態であるかは、観点の取り方によって決定されるはずである。（Urbach, 1978, p. 125）例えば太陽系においても、もっと長期的に考えれば、あるいは化学的、生物学的な観点からすれば、それは反復的なものではない側面が見えてくる。同じように、社会においても、ある一定の側面から見れば、静態として解釈できる場面も存在するだろう。例えば、市場は太陽系と同様の「非平衡定常系」であると解釈も成立する。したがって、社会現象は、ただちに長期的予測を排除するような対象ではないのである。またポパーは、《歴史主義》の長期的予測を、太陽系とのアナロジーをもった《歴史主義》の主張として規定しているが、これは、例えばマルクス主義的な《歴史主義》——それは非反復的なものを、すなわち市場経済から社会主義経済への移行を、予測する——を論駁することにはならない。ポパーは暗黙裡に、反復的なものは予測可能であり、非反復的なものは予測不可能であると想定しているが、しかしこれは正しくない。非反復的なものでも、それは普遍法則と初期条件の一定の組み合わせによって、原理的には予測可能である。（例えばハイエクは自らの景気循環論によって大恐慌を予測した。）これに対してポパーは、「しかし《歴史主義》の場合は、条件付けられた科学的「予測」と区別される、無条件的な非科学的「予言」なのだ」と主張するかもしれない。ところが「予言」についてのポパー自身の最初の規定は、それが科学の中に含まれていることに注意すべきである。彼は、科学的予測を「予言」と「工学的予測」の二種類に分類して、前者は台風のように「われわれが阻止できない出来事」とし、後者は「工学の基礎となる」ものだとする。その場合ポパーは、「工学的予測」のみが科学であるなどと、決して主張してはいないのである。だから予言は、ポパーの定義からいっても「科学」である。このことは、《歴史主義》に科学的地位をあたえる論拠とさえなりうるのだ。

第四の論拠：《歴史主義》の条件について。Shaw(1971, p. 299)は、ポパーのいう《歴史主義》を、急進的(radical)《歴史主義》と限定的(limited)《歴史主義》に分類している。前者は、不可避的な歴史法則と正確な予言を獲得すると主張するものであり、後者は、予測が限定されていることを認めるものである。（これは前述した私の分類では、予言《歴史主義》と予測《歴史主義》にはほぼ対応する。）これら二つの《歴史主義》は、いずれも一定の社会的条件が満たされれば、成立

する、とShawは考える。例えば急進的《歴史主義》は、そこにおいて人々が予言を深刻に受け止め、また予言を反証によって排除するという批判的アプローチをもっていなければ、成立する。そこでは、予言に対する人々の信念が、エディプス効果を通じて再帰的に予言の成立を可能にするという社会的条件が存在するからである。しかしこのような条件は、創造効果(creativity effect)——例えば新たな科学的発見や新たな社会技術の発明など——によって常に崩壊する可能性をもっている。そこでこの効果を慎重に考慮するなら、それは限定的《歴史主義》と呼ばれることになる。限定的《歴史主義》は、エディプス効果および創造効果についてあらかじめ考慮しながら、歴史法則を仮説的に定式化する。したがってそれはまた、人々の実践に対しても有効な助言をすることができる。それは次のような形をとるだろう：「もしAをすれば、Bが実現される／されないだろう」。例えば、もし労働者が運動を激化すれば社会主義が実現するだろう、という具合である。あるいはもっと巧妙な形では、「社会主義の到来は必然(necessity)である、もし労働者がそれを必要(necessitate)とするならば」、と述べることも正当化される。（そしてこのような実践へのインプリケーションは、基本的にはポパーのいう部分工学と両立する。）したがってポパーの《歴史主義》批判は、《歴史主義》が科学的仮説として定式化できないという意味では、失敗していることが理解されよう。

第五の論拠：知識の獲得について。ポパーは『貧困』の序文で、次のような大胆な主張をしている。「『貧困』の中で、私は《歴史主義》が貧しい方法であること、つまり少しも裏りをもたらない方法であることを示そうとした。しかしそこで私は、実際のところ《歴史主義》に対して反駁していなかった。それ以降に私は、《歴史主義》を反駁する証明を行うことに成功した。つまり、厳密に論理的に諸理由からして、歴史の未来の経過を予測することは不可能である、ということを示したのだ。」ここでいうポパーの反駁論証の概略は、次の通りである。(1)人間の歴史の経過は、人間の知識が成長することによって、強く影響を受ける。(2)合理的ないし科学的な方法によって、われわれの科学的知識の将来の成長を予測することはできない。(3)だからわれわれは、人間の歴史の未来の経過を予測することはできない。(4)このことは、われわれが理論的歴史学の可能性を否定しなければならないことを意味する。すなわち、理論物理学に対応するような歴史的社会科学の可能性を否認すべきことを意味している。歴史的予測の根拠として役立つような、歴史の発展に関する科学的理論はありえない。(5)

《歴史主義》的諸方法の基本的なねらいは、したがって誤解に発しており、かくて《歴史主義》は瓦解する。さて、まず第一に検討しなければならないのは、ポパーは「貧困」において《歴史主義》を反駁していない、という主張である。しかし私は、「貧しい方法として示すこと」と「反駁」のあいだには程度の差しかないと考えている。反駁(refutation)は反証(falsification)と違って、科学理論以外にも有効な方法であり、それはポパーの中では、「決定的」な理論選択の論拠という役割をはたしてはいない。ポパーは反駁という用語を、理論の「排除(rejection)」という意味で用いているが、「貧しい方法として示すこと」も、一つの「排除」論拠であると言えるだろう。したがって、ポパーが知識論についての考察を《歴史主義》の強力な反駁論拠であると考えたとしても、このことは『貧困』の考察全体が《歴史主義》を「反駁」するものであるという事実を排除しないように思われる。むしろ『貧困』は、《歴史主義》を「反駁」する試みであるが、それは決定的ではない、というのが適切だろう。(もっともこの問題は、「反駁」という用語をどのように定義するか、という言葉の問題にすぎない。)次に、上のポパーの「反駁」が妥当であるかどうか、検討してみよう。Urbach(1978, p. 126)によれば、(2)の言明は、次のような暗黙の言明を前提としている。「われわれは、予測できない出来事によって強く影響されるような出来事を、合理的ないし科学的方法によって予測することはできない。」しかしこれは、一般論として誤りである。なぜなら、一連の出来事の規則性は、個々の出来事が予測不可能な事象によって強く影響されていることと両立可能だからである。例えばマクロ経済学における消費関数の規則性は、ミクロにおける消費者の行為が、それぞれ予測できない要因に強く影響されているとしても、成立する。同様に、歴史法則の定式化は、個々の人間の行動が予測できないとしても、可能である。したがってポパーの(2)は、《歴史主義》の反駁にはならない。おそらくポパーは、将来の知識の「成長」を予測できない以上、歴史は非決定的であるということが言いたいのであろう。しかし、将来の出来事の非決定性は、それを「科学的に推測する」という可能性を否定しないのだ。ポパーはこの「科学的推測」と「科学的かつ決定論的予測」を区別していない点で、論証に不備がある。(4)および(5)の論証についても疑わしい。これについてはすでに、上述の「第三の論拠」において論じたとおりである。すなわち、社会現象と物理現象のあいだに、明確な性質の違いを主張するポパーの二元論は支持しがたい。ポパーは社会現象が複雑であると想定するが、しかしこのことはまたポパーが「合理性原理」を導入する論拠、すなわち社会現象は物理現象ほど複雑ではない、という

主張とも矛盾する。

以上、《歴史主義》に対するポパーの論駁が無効であることを論証してきた。ポパーの批判は、素朴な《歴史主義》に対しては有効であるとしても、科学仮説として定式化された洗練された《歴史主義》に対しては無効である。しかしこのことは、洗練された《歴史主義》の科学理論が、実際に反証に耐えるかどうかについては何も述べていない。もしほとんどの《歴史主義》の理論が反証されるなら、それは研究プログラムとして成立しないことになる。実際、この意味で《歴史主義》が貧困であると指摘することも可能である。つまり、「《歴史主義》は、方法論としては可能であるが、理論としては不毛である」と指摘すればいいのであり、それは、ポパーが実際に『開かれた社会』においてマルクスの理論を検討したのと同じ仕方である。そして私がポパーを評価するのも、この点においてである。ただ、マルクスの《歴史主義》理論が反証されたとしても、ポパーも指摘するように、このことはただちにその理論を放棄すべきことを意味しない。もし他にすぐれた理論が存在しなければ、マルクスの理論は依然として保持すべきなのである。



意図されざる帰結、 開いた社会、市場

吉澤昌恭 (広島経済大学)

1. 歴史予測の不可能性

私見によれば、『歴史主義の貧困』に於けるポパーの主張は、①社会科学の主要任務は歴史の行く末を予測することにあるのではないし、②歴史予測は不可能である、という2点に集約できる。同書の冒頭部分に次の如き命題が掲げられている。

- (1)人間の歴史の経過は、人間の知識が成長することによって、はなはだしく影響を受ける。
- (2)合理的もしくは科学的な方法によって、我々の科学的知識が将来どのように成長するか、を予測することは不可能である。
- (3)従って、我々は人間の歴史の未来の経過を予測することはできない。

さて、ポパーによれば、歴史予測を社会科学の主要任務とみなす「歴史主義」の淵源は、変化への恐怖にある。こうした歴史主義を代表する最も重要な人物がプラトンとマルクスだ、というのである。前者にあっては、その歴史主義が悲観論と結びついている。つまり、あらゆる変化は衰亡への動きに外ならず、従って、全ての変化は阻止されねばならない。かくして、化石化した理想国家が追い求められることになる。

他方、後者にあっては、変化即ち発展なのであって、現状維持は許されざる所業だということになる。変化さえをも支配する不変の運命法則が探求される。こうした法則こそが理想国家へ向けての道しるべになる、というのである。

2. 社会科学の主要対象＝意図されざる帰結

歴史予測が社会科学の主要任務でないとするれば、社会科学の主要任務とは何なのであろうか？

「我々の社会環境の構造がある意味で人為的であることは認めなければならないし、社会制度も社会の因襲も神の作品でもなく自然の作品でもなくて、人間の行為と決断の結果であり、また人間の行為と決断で変更の可能なものであることを認めなければならない」とポパーは言う (*Open Society*, 第14章)。しかし他方で人間の行動は当初は予想もされなかった「意図されざる社会的反響 (the unintended social repercussions)」を惹起せしめるのである。

かくして、社会科学の主要課題は次の如きものだ、ということになる。：即ち、意図的な人間の諸活動の意図されざる社会的諸反響 (the unintended social repercussions of intentional human actions)の分析；或いは、社会の領域内部でのあまり明白でない依存関係の発見と説明、並びに社会活動の妨げになる諸困難の発見

3. 開いた社会と移行期の衝撃

ポパーによれば、変化への恐怖こそが歴史主義の淵源であり、開いた社会とは変化と不可分の社会である。プラトンとマルクスの思想は閉じた社会への帰還願望を反映するものである。閉じた社会と開いた社会はそれぞれ次のように特徴づけることができる。

閉じた社会 — 慣習が非常に厳格なものであり、人々はその慣習に対して呪術的・非合理的な態度で服従する。しかし、個々人は「触れる」「嗅ぐ」「見る」といった具体的な行為によって関係づけられている。

開いた社会 — 社会生活上の規約を変更する可能性があり、人道主義の花開く可能性が存在する。しかし、個々人の関係は、抽象的で温かみのないものになってゆく。

閉じた社会から開いた社会への移行は、人類が今までに経験してきた最も深刻な革命のひとつである、とポパーは言う。この革命はまだ初期の段階にあり、今なお、そのマイナス面の方がはるかに耳目を集める状態にある。しかし、人類が開いた社会への道を歩み出した以上、可能な選択肢には次の2つのものしかない。①閉じた社会への帰還の試みとそれに結びついた野蛮、②不安の中での開いた社会を目指しての前進、がそれである。

4. 市場機構の非人格性と3つの選択肢

開いた社会の特徴を最も象徴的に表わすものが市場機構ではないだろうか。市場機構の下では、人々の利己心に根ざした勝手な経済活動が価格というものを媒介にして相互に調整されるのである。しかし、市場機構とは非人格的な機構である、というのが筆者の年来の見解である。一方で、市場での取引に際して、思想・信条・人種・国籍・年齢・性別といったものが問題にされることは全くなく、全ての人々が平等に扱われる。しかし、このことは裏を返せば、市場での取引には人間的な温かみ、思いやりといったものが入り込む余地は全くない、ということの意味している。市場では、消費者の欲求充足に貢献し得た者にしか報酬は与えられないのである。ある人が道徳的にいかに優れた人であったとしても、或いは、ある人がいかに生活に困窮していたとしても、そういったことは市場機構の下では何の意味も持ち得ないのである。更に、今まで市場機構の下で十分な所得を得ていた人が、人々の欲求の変化の結果として、或いは、他の生産者の導入した技術革新の結果として、突然無一文になる、といったことも起こり得るのである。

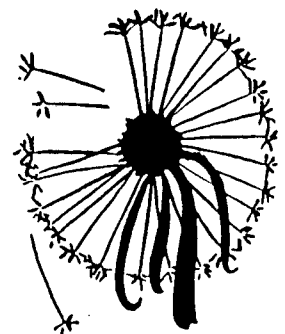
更に、市場機構にはその他にも様々な欠陥がある、と言われてきた。いわく、市場には景気循環はつきものである。いわく、市場的所得分配は不平等なものになりがちである。いわく、

市場での競争は独占を招来することになる。

こうしたことを前にした時、市場機構に対する選択肢としては、少なくとも3つのものが考えられる。

- (1)市場機構の下での競争の自由放任
- (2)市場機構の放棄
- (3)市場機構の保持とそれを補完するための社会・経済政策の実施

筆者は第3の方向を採る。そして、これが開いた社会を実現するための、最も重要な条件のひとつなのである。



ポパーと科学哲学

横山輝雄（南山大学）

ポパー哲学全体の中で科学哲学がどのような位置を占め、どのような意義をもっているのかは非常に興味深い問題である。そのことは、科学哲学が哲学一般の中でどのような意義をもつか、あるいは持つべきかという問題にもかかわってくる。ポパーの哲学は、もちろん科学哲学に限定されるものではないし、彼の哲学の全体の中で科学哲学のもっている意義を過大に評価するのは正しくないであろう。しかしポパーが科学哲学にかなり大きな貢献をしていることを無視することは逆の行き過ぎであろう。『科学的発見の論理』から『自我と脳』にいたる著作が、科学哲学の著作である（それにつぎるわけではないが）とすることに問題はないであろう。

科学哲学には、大きく分けて二つのものがある。第一は、「科学方法論」である。それは科学に関するメタ・レベルの理論分析である。すなわち、科学とは何か、科学的知識と他のものはどのように違うのか、科学の方法や手続はいかなるものか、などについて科学一般に共通する問題を論ずるものであり、より一般的には知識論や認識論と呼ばれるものである。第二は「自然哲学」あるいは「宇宙論」である。これは自然、宇宙、実在などについてのものであり、科学が対象としているのとある意味で同じ対象を扱う。このような自然哲学がはたして科学と別に展開しうるかどうかについてはさまざまな問題がある。しかし量子力学や進化論と関連した「哲学的問題」が存在していることは確かであり、たとえそれらが最終的には科学に解消してしまうとしても、こうしたものを自然哲学の例としてあげることができよう。

20世紀後半の現在にいたる科学哲学の流れにおいては、最初第一の科学方法論が主流だった。科学と非科学の境界設定、反証可能性、バ

ラダイムなどの問題がそれである。それに対して近年は、第二の自然哲学的な問題に関心が集まってきている。それは進化論、宇宙創成論、人工知能、環境問題などと関係したものであり、科学哲学における「宇宙論への回帰」とも呼ばれている。『科学的発見の論理』から『自我と脳』にいたるポパーの科学哲学の歩みもこうした科学哲学一般の展開とその方向が一致していることは容易にみてとれよう。

科学哲学における科学方法論と自然哲学は、問題や主題の異なった二つの領域であり、ちょうど物理学と生物学がそうであるように、それぞれの領域で別々に研究が進められればそれでよいと一応は言うことができよう。しかしこの両者の関係について考察することも、個別科学とは異なった哲学の課題である（物理学と生物学の関係の考察もそうである）。この問題はポパーの場合にも提起することができる。それは、前期ポパーと後期ポパーの哲学の関係をどう理解するべきかという、ポパー哲学に内在した問題としても成立しうると思われる。

第一の、科学方法論の立場からすれば、進化論であろうが宇宙創成論であろうが、いずれにせよ科学理論ないし仮説であり、それらは科学方法論の規準が適用され対象である。それらの理論ないし仮説がどんなに一般的で、包括的、あるいは大規模な内容をもっていようと、他の科学理論、仮説と身分上何の違いもない。こうした見方からすれば、後期ポパーが展開している進化論的な理論は、それ自体としては単なる一つの科学的仮説の提唱か、あるいはそれ以前の心理的な、発想の母胎となるイメージ、あるいは「形而上学」の表明であり、いずれにしても反証可能性、議論可能性などといった科学方法論ないし知識論、認識論の哲学的問題とは本質的に何の関係もないことになる。すなわち極端に言えば、後期ポパーの議論は科学哲学者としてのものではなく、一人の科学者としてのものであるということになる。

それに対して第二の、自然哲学の立場からす

れば、試行錯誤、問題解決といった「アメーバから人間まで」にいたる進化の過程における一つの現れが科学という人間の営みである。そうした見方からすれば、前期ポパーが展開した議論は、試行錯誤や問題解決の進化の過程における人間に特殊な場合を詳しく展開したものである、ということになる。すなわち前期ポパーは後期ポパーの一部分を展開したものであり、後期ポパーこそが全体的で包括的な完成された体系であるということになる。

ポパー哲学の解釈としてどちらが妥当であるかについては、ここで深入しないことにする。おそらくどちらの解釈も単純化したものであり、そもそも二者択一という問題設定にも疑問がある。しかしながら、このような問題設定のもとに科学方法論と自然哲学の関係を考えると、ただ単にポパー哲学の理解という問題だけでなく、今日の科学哲学が扱うべき重要な問題に接近できると思われる。

第一の問題の方から出発して考えてみよう。ポパーの反証可能性や境界設定に関する『科学的発見の論理』における議論は、クーン以降の議論の後では、少なくともそのままの形では維持できないと思われる。ラカトシュやローダンの議論はそうした点をふまえたものと言えよう。ポパー自身も『推測と反駁』以降、(科学と非科学の)境界設定よりも議論可能性、批判可能性などの必ずしも科学方法論に限定されない方向へと重点を移動させているようにも思われる(しかしそうではあっても知識論、認識論一般という枠は逸脱してはならず、それらは自然哲学的な議論ではない)。クーン以降の反合理主義の科学哲学者たちは、いずれもポパーやラカトシュをその批判の対象としているが、彼等は、心理学、社会学などの経験科学の延長線上に、知識論、認識論、あるいは科学方法論を展開すべきだと考えており、広い意味での「認識論の自然化」を志向している。ただし近年のローダンも自らの立場を「自然主義」と称しているし、また社会学的科学論からは、合理主義の

一種として批判の対象になっている「コンピューターによる科学哲学」が本当に広い意味での自然主義でないのかどうかは、そう簡単にはいえない。今日の自然主義は、その一部に特定の科学への単純な還元主義がみられることは事実だとしても、全体としては、さまざまな批判を考慮して展開されており、それほど単純ではない。

自然主義という言葉があまりにも広く漠然としたものになってしまう危険性があるので、その意味をここで明らかにしておきたい。科学方法論、知識論、認識論における自然主義とは、超越論的な立場に対立するものであり、クワインなどの物理学還元主義もその一つであるが、それに限られるものではなく、ある種の歴史主義も含みうる広い意味で用いられている。科学方法論の場面で言うと、ある特定の方法、例えば反証可能性の規準は、超時間的、超歴史的な規準ではないという立場である(それゆえこうした見解からしばしば相対主義が帰結するとされる)。ポパーの『科学的発見の論理』における「反証可能性」は一見したところ超時間的、超歴史的な規準であるように思われる。しかしポパー自身はそれをエリート科学者の直観によってある種の「正当化」(この言葉はあまり適切なものではないが)をしようとしているような箇所もある。この点を明確にしたのがラカトシュであり、「科学史のない科学哲学は空虚である」として科学方法論についてのメタ規準の問題を生成論的、歴史的な議論と関連づけて提起した。ローダンの自然主義もこの延長にあるものである。それゆえ第一の方法論から出発してほしだいにその歴史的あるいは生成論的な議論に近づいていくことになる。この場合の歴史的な議論の題材は狭義の科学史の場合もあるが、科学でなく批判可能性一般ということになれば、古代ギリシャにおける批判的思考の起源の問題といったこともその例になる。こうした生成論的、歴史的な議論をどこまで延長するかについていろいろな問題があるが、それらは進化論的

な議論につながるものをもっているといえよう。

他方第二の自然哲学の方から出発するとどうなるであろうか。例えば進化論的な議論の場合、そこでの進化論は、特定の生物進化についての理論ではない（社会生物学などにそうした単純なものがないわけではないが）。そもそも自然科学と別の自然哲学がいかなる意味で可能であるか、あるいは可能な場合その両者はどう関係しているのかといったことについて、自覚的、反省的な議論が必要である。そうだとするとこちらの方から出発するとしても第一の方法論的な議論は不可欠である。それゆえどちらの側から出発するとしても、ともに他方にかかわることになる。

最後に別の角度から科学哲学における科学方法論と自然哲学の関係についてもう少し考えておこう。科学哲学の歴史においてある特定の自然哲学的問題が科学方法論の問題と密接に結びついていたのは、デカルトやニュートンの時代の粒子論から、今世紀初頭の「物理学の危機」にいたるまで同じである。たとえば今日「デュエム・クワイン・テーゼ」で知られているP. デュエムの知識の全体主義や道具主義は、彼の科学哲学の一面にしかすぎなかったことが指摘されている。彼の議論は物理学における数学の役割をめぐるイギリス学派とフランス学派との当時の論争などと関連しており、そのため彼は生理学においては知識の全体主義をとらず、また「実在と知識の対応」といったことも主張している。

今日の進化論や人工知能、暗黙知などをめぐる科学哲学的な議論は、自然哲学的なものであると同時に科学方法論的なものでもあり、こうした問題をポパーの前期と後期の関係をどう理解するべきかという問題とも関連させて解明していくことは今後の科学哲学の重要な課題であろう。

新入会者・退会者・住所変更など

新入会者

東條隆進

〒187 東京都小平市花小金井4-12-6

早稲田大学

専攻：経済思想史・経済社会学

電話 自 0424-63-7295

勤 03-3203-4141

内野正幸

〒135 東京都江東区猿江2-16-23-1023

筑波大学

専攻：憲法

電話 自 03 3632-4922

勤 0298 53-4008

退会者

矢嶋喬四郎

退会理由：一身上の都合のため

住所等変更

蔭山泰之

〒277 千葉県柏市しくしが丘5-15-12

富塚嘉一

電話 自 03-5814-1393

「事実世界における価値の位置」について

杉田秀一

1 はじめに

ポパーの自伝『果てしなき探求』（原著1974年）の最終節である第四〇節「事実世界における価値の位置」は、ごく短いが、ポパーが価値について論及した数少ない論考のひとつで、ポパー後期のものであり、しかも大胆な主張を含む注目すべき論考である。にもかかわらず一般にその意義が必ずしも十分理解されていると思われない。原著・翻訳の公刊から二十年近くたった今日でも、この論考について論及した論文がほとんど見受けられないのもその現れと言えよう。その背景には、この論考が一見不可解な、議論の混乱と見られかねない点をいくつか含んでいるという事情がある。本稿は、これらの点の解消へ向けて解釈を試みる。

2 基本問題

—「事実世界における価値の位置」

自伝第四〇節のうちでおそらくもっとも読者をまごつかせ、この論考を敬遠させる原因となるのは、第五段落までの部分と第六段落との間にあるように見える内容上の断層であろう。第五段落でポパーは、それまでの議論を受けて、生物体の無意識的な問題により生みだされる価値と、人間の心による意識的な問題により生みだされる価値との二種類の価値があると結論する。だがその直後、第六段落の冒頭こう述べる。

This is the place I see for values in a world of facts. It

is a place in the third world of historically emergent problems and traditions, and this is part of world of facts...

ポパーは、「事実世界における価値の位置」を世界3に認めるというのである。しかしこれは、前段落までの議論をひっくりかえす主張のように見える。前段落で強調したばかりの意識なき生物体の問題により創出される客観的価値の存在はどうなるのか？そのような客観的価値は（その本性上当然なのだが）世界3の居住者でないとポパーはすぐ前（第三段落）で示唆していたではないか？少なくとも世界3に居住する価値は、価値全体の一部でしかないのではないか？

しかしこのような印象と疑問は、ポパーの簡潔にすぎる議論の運びのせいでもあるが、この節でポパーが取り組んでいる基本問題を読者が捉えそこなっていることの結果である。この節の表題にも掲げられている「事実世界における価値の位置」とはいかなる問題であるか？この点が鍵なのである。

この基本問題は、「ケーラーの問題」として、ポパーにより次のように定式化されている（第一段落）。

P k 諸事実の世界において諸価値はいかなる位置を占めるか？また諸価値はいかにして諸事実の世界に入り込めるか？

しかし残念ながらこの定式化は十分問題を表現していない。ポパーが「みごとに表現されているばかりでなく、またきわめて感動的である」と評する、W. ケーラー自身のP kの定式化は、その著書（The Place of Value in a World of Facts, 1938）の第一章全体を費やしてなされていた。

この問題の背景について、私なりに、最低限の補足をすればこうなる。科学（学問）は人間にとって最も重要なはずの価値問題に関して何ら貢献しないのではないか？科学が価値を合理的に扱い論じようとしても、価値そのものがすりぬけてしまう。それどころか科学は価値の問題の存在自体の否定へと傾いている。そのような風潮は科学者から一般人へと浸透しつつある。——P k は、このようなケーラーの感じた当時のヨーロッパ（そしてアメリカ）の知的雰囲気に対する危惧から発せられた問いであった。ポパーは、このP k をなお生きている問題として捉えそれに取り組んでいるのである。

このような背景からすれば、（客観的な意味での）P k は、私の見るところ、次のような複数の問題と想定された複合である。

P r いかにして価値の実在性それゆえ価値問題の存在を示すか？

P a いかにして価値問題に関する合理的議論は可能か？

T r 実在性は何らかの事実の中の位置により示される。

T a 合理的議論が可能な対象は何らかの事実としての身分を持つ。

それゆえ以上を念頭に、P k を言いかえれば（なお不完全だが）こうなる。

P k' 合理的議論の可能な対象としての諸事実の世界において諸価値は、認識主体に対する価値としての力を維持しつつ、いかなる位置を占めるのか？また諸価値は、価値としての力を維持しつつ、いかにしてこのような諸事実の世界に入り込めるか？

先に引用した第六段落の部分は、この問題に対し、＜事実の世界のうちの世界3の周辺に＞また＜世界3に入ることによって

＞と答えているのである。意識なき生命の問題により生まれた価値でなく、人間の心による、意識的な問題解決の試みにおいて生まれた価値の占める位置こそ、「事実世界における価値の位置」である、と述べているのは、この意味である。

3 問題・価値・事実

だが第四〇節に対し読者が抱くもうひとつの大きな疑問点—ポパーは、第三段落で事実価値二元論を取ると明言している（それは上のT r と衝突する）のだから、そもそもP k のような問題設定はありえないはずではないか？—が残っている。そこで第三段落から第五段落までに展開される価値・問題・事実三者に関するポパーの主張に立ち入らなければならない。

第三段落で、ポパーはまず次の二つのテーゼを提起している。

T 1 価値は問題とともに発生する。

T 2 問題や価値を事実から導出または獲得することはできない。けれども問題も価値もしばしば事実に属し[pertain to facts]あるいは連結される[are connected to facts]。

目新しいT 1 に対し、T 2 は単なる事実価値二元論の繰返しとして見過ごされやすい。だがP k を主問題とする文脈では、

T 2（特にその後半、原文では“though”以下）の方こそ注目されるべきだろう。というのもこのT 2 には、（後続の議論から見るとだが）、P k の問題設定を許容するような、事実価値二元論のいっそうの展開ないし深化がうかがわれるからである。たしかにポパーはすでに、『開かれた社会とその敵』（第5章[1945年]と追録[1961年]）において、「決断」が（社会的・心理的）事実でありうるという単なる論理的関係以

上の価値・事実関係(a)を、「決断」の二つの意味という理解の下で、消極的に認めていた。だがこのT2において、彼は、価値が価値の力を持ちつつ事実として現れる(「事実世界における位置」を占める)という可能性(b)を認識するに至り、言明間の論理的関係という問題次元をはっきりと越えたのである。

T1はT2を主張するための大胆な布石である。これらのテーゼの提示に続く第三段落の議論は、問題と価値の相関性(T1)を基礎に、T2のうちの問題に関する部分による、T2の価値に関する部分についてのある種の説明を提示する試みと読める。ポパー流の話法の効果をだいなしにするのを覚悟で私なりの話法を使うと、こうなる。すなわち認識主体にとって問題が事実として現れる態様には、次の二つの場合がある。(a)理解などのメタ問題における対象レヴェルの客観的問題のように、問題が事実「に属し」認識主体には問題としての力を及ぼさない場合(「死んだ問題」)。(b)認識主体が直接その解決に意識的に取り組むところの理論的問題のように、問題が事実「に連結され」ながら(事実世界に位置を占めながら)なおかつ認識主体に問題としての力を及ぼしうる場合(「生きた問題」)。このような二つの場合がある点、(さらに言えば、その事実は世界3的事実である点)、価値も同様だ、というのである。(b)に対応する場合、例えば規範は(その相関する問題はしばしば定式化されないままだが)客観的に叙述・批判・議論される。(もちろんこのような場合、「事実」という語の使用は通常の語法を逸脱する。ポパー自身は「事実世界に位置を占める」というような曖昧な表現のみを使っているのは、そのせいかな?)

念のために言えば、このように解しても、

T2の前半は維持される。つまり、価値が連結された事実を述べる文(いわゆる価値命題)を価値の連結されない事実を述べた文(いわゆる事実命題)だけから導出できない。また(認識主体の問題に相関する)価値を、価値が連結された事実か否かを問わず、事実だけから獲得することもできない。(なお便宜上「属する」「連結される」の語をふりあてたが、以上の解釈はこれらの語に依拠していない。「死んだ問題」、「生きた問題」の表現は、ミスリーディングかもしれないが、ポパーの「客観的精神の理論について」第十節より借用した。)

さてT1は、それ自体としてもまたこの論考の議論全体にとっても、重要な含意をもつ。意識なき生物体の問題にさえ相関して生じる客観的価値の存在である(第四・五段落)。上のT2で示唆されている、事実に対する価値の超越性は、この価値の客観的存在性格に由来する。また最初に言及したPkとそれへの応答(第六段落)が有意義であるのも、このような価値の客観的理解を背景にすればこそであった。

以上のように解釈されたポパーの形而上学的議論は、当然多くの疑問と異なる評価を呼び起こすであろう。例えば、<事実世界において位置を占める価値>、<価値が連結された事実>なるものは、曖昧で混乱した観念ではないか?それらは、価値の特殊な存在性格を暗示できてもそれを解明はできないのではないか?あるいはそれらはむしろ実践を遂行するための教示の道具か?Pkに対するポパーの応答はどれだけその解決になっているか?——より本格的な批判的検討は別の機会に行いたい。

以上

(法哲学)

書評 小河原誠著『討論的理性批判の冒険』

蔭山泰之

本書は恐らく日本で初めての、汎批判的合理主義思想の本格的な再構成の試みである。著者が序文で述べているように、本著作は、「われわれの知的活動に生き生きした討論の精神を脈打たせ、現存の一切の思想や制度を徹底的な批判にさらす新しい生の様式を語ること」を意図している。

本著作は、五つの章と二つの付録からなっているが、冒頭の著者の意図に違ふことなくそのうちの第一章と、第五章の後半を除いて、そのほとんどすべてが汎批判的合理主義（ないしは批判的合理主義）について発生した実際の討論、論争の再構成に当てられ、これらの討論を通じてこの立場の根本的な考え方、思想の核心を明らかにしていくという方法が採られている。これらの論争において（汎）批判的合理主義の立場の代表者は、アメリカのウィリアム・バートリー三世、旧西ドイツのハンス・アルバート、および著者である。そして、これらの論者の思想の根底には、つかず離れずカール・ポパーの批判的合理主義が見え隠れしている。

なぜ批判的合理主義、さらには汎批判的合理主義の立場が要請されてくるのか、このことを理解するためには、どうしても正当化主義的合理主義の限界なるものを理解しておく必要がある。そしてそのためには、絶対的正当化の試みは1) 無限背進、2) 論理的循環、3) 正当化の恣意的打切りのいずれかに逢着してしまうという、アルバートが定式化したほら吹き男爵のトリレンマを理解するのがもっとも近道である。ということで第一章は、このトリレンマを敷衍するかたちで、汎批判的合理主義についてはじめての人でもわかりやすいように、この著作全体への導入を形成している。このトリレンマの事態に直面して、懐疑論者や信仰主義者のよう

に合理性を放棄するのではなく、すべては批判にさらされうることによって、正当化主義とは180度考え方を転換して、汎批判的合理主義者は合理性の可能性を認めようとする。

以上のような汎批判的合理主義の基本的な考え方を明らかにした上で、第二章と第三章では、バートリーの戦った論争を再構成し、第四章では、アルバートの戦った論争を再構成している。もちろん、著者も汎批判的合理主義者のひとりであるので、論争を単に思想史上の過去の出来事として記述するのではなく、自らもその討論に参加するかたちで、論点を生き生きと描き出している。

これらの論争の論点は、おおまかに次のようにまとめられるだろう。すなわち、汎批判的合理主義をあたかも言明の論理的な関係についての理論であるかのように扱った場合、その基本的な命題である「すべては批判に開かれている」ということが論理的矛盾を含んでいるかどうかということと、この立場の出発点となったほら吹き男爵のトリレンマが、あらゆるケースについて成り立つかどうかということである。前者は、ワトキンスやポストのバートリー批判の論点であり、後者はアーベルのアルバート批判の論点である。

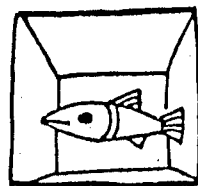
確かに、「すべては批判に開かれている」という命題は、自己言及的な命題であり、これ自体の論理的身分を問うことは、一見興味深いことのように見える。しかし、これをもって汎批判的合理主義の存立を云々するのは、完全にこの立場の論点を取り違えている。もちろん、バートリーや著者は、これらの問いかけに対して、明確な答えを与えており、そのプロセスはこの著作に詳細に描き出されている。しかしながら、そもそも汎批判的合理主義は、言明の論理的関係についての理論ではなく、著者が本書で明快に述べているように、人々の知的態度についての思想である。記号を駆使したテクニカルな理論ではなく、批判に対してオープンでいることがどれほど社会的に重要な意味を持つかという

ことを論じる、いわばひとつの社会思想である。ところが、CCR論争では批判者たちによってもっぱらその基本命題の論理的妥当性が問題とされてしまっている。これはあたかも、ポパーが反証可能性の理論を提唱した初期の頃に、これが単に検証可能性理論の論理的な裏返しに過ぎないと解釈され、決定的な反証もまた論理的に不可能であるなどと批判されてきた事態に似ているように思われる。ポパーが問題にしたのは全称命題と存在命題の論理的な関係ではなく、アインシュタインの自らの理論に対する態度と、フロイト主義者やマルクス主義者の自分たちの理論に対する態度の決定的な違いであった。ポパーもバートリーも（そして著者も）、この論点の取り違いを矯正するのにいろいろと苦労している。（この点を考えてみると、ポパーの思想の持つ社会的意義を深く突きつめて、反証可能性の規準による経験的と非経験的の境界設定は、合理的と非合理的の境界設定よりも重要ではないとしたバートリーの批判に対して、ポパーその人がこれを「見当はずれの批判」と断定してしまったのは、なんとも皮肉な話である）以上のことは、アーペルのアルバート批判についてももちろんあてはまる。アーペルはほら吹き男爵のトリレンマが正当化のもつ語用論的な側面を捨象してしまっているとして批判しているが、アーペルこそ討論のもつ時系列的な側面を捨象してしまっている。アーペルは批判が出来るためには、その根拠として少なくともなにかを無条件に受け入れる必要があると言うが、今日の批判の依って立つ根拠と明日の批判の依って立つ根拠が常に同じでなければならない理由などどこにもない。むしろ、それがいつまでたっても同じであれば、汎批判的合理主義者が目指す知識の成長など、永遠に望めなくなるだろう。また、「非合理主義者は自己矛盾している」といったところで、非合理主義者にはなんの打撃も与えないし、また合理主義者にとってもなんの助けにもならない。問題とすべきは、非合理主義者であることの社会的意味、合理主

義者であることの社会的意味なのである。

バートリーがThe Retreat to Commitmentを著した時に問題にしたのは、ケーススタディというかたちではあったが、現代プロテスタンティズムにおける信仰の問題という優れて社会的な問題であったし、アルバートのTraktat ueber kritischen Vernunftにおいても、その大半において倫理、イデオロギー、神学、政治などの問題が論じられている。そしてこの『討論的理性批判の冒険』においても、第三章の最後で、汎批判的合理主義を「社会的行為あるいは社会そのものの合理性を問うための基礎理論とする可能性」を指摘し、第五章の後半でこの可能性を例証するように、この思想立場のもつ意味を現代の情報化、専門化社会の実態に即して具体的に論じている。特に、この著作でこれまでの批判的合理主義関係の議論にはない新鮮な論点として挙げられるのは、丸山真男の論点や空海の事例などを援用して、「わが国の知的メタコンテクストの問題的性格」を鋭く指摘している点である。これはもちろん、日本の論者にして初めて可能であった議論ではあるが、現代の日本の政治状況などを考えてみれば、ここで指摘されている事柄はもっともっと問題にされてしかるべきであろう。

ともかくも、汎批判的合理主義思想の迫力を実感するためには、ぜひともこの著作を手にとってみることである。とくに、合理性について真剣に考えようとする人たちにとっては、どのような立場に立つにせよ、一読に値する論考であると言えよう。



京都賞に関するアガシへの報告およびその返信

立花希一

京都賞についてアガシに報告したところ、多くの人が興味をもたれるのではないかとと思われる返事が戻ってきた。アガシの承諾を得てここに掲載させていただくことにしたい。

November 17, 1992

Dear Prof. Joseph Agassi,

When I was sending you an electronic mail, I was involved in trouble. I had to stop sending my mail. I am sorry for that. I am not sure whether my mail reaches you or not. Then I will write to you again.

I could not talk with Popper because he was surrounded by too many people.

I wanted to ask him a question: On page 235 in his book, *Realism and the Aim of Science*, Popper uses the words 'may' or 'might'. Thus he distinguishes one case from another. That is, a case that supports the theory and another case that does not support the theory. Questions: 1. What are the circumstances which differentiate one from another? In the case of "may" support and the case of "may not" support. 2. How and why can a black cormorant support the theory that all swans are white? After all, it is only an instance of the theory!

Will you reply my questions in his stead?

There was held a Kyoto Prize Workshop "Philosophy of Open Society", on November 12, from 1:20 to 6:00. The following is my report.

Popper gave a commemorate lecture, titled, "The Origin of Western Culture and Its Literary and Scientific Roots." He focuses on Greek publishing and book market. It will be published soon.

Besides there were four lectures.

1. Kei Takeuchi: Enemies of Open Society within. This title seemed to be interesting.
2. Keiichiro Kamino: On Popper's Critical Rationalism. He was a former pupil in London from 1963 to 64.
3. Kobun Takashima: Popper's Philosophy as a Theory of the Growth of Knowledge.
4. Makoto Kogawara: Open Society and Critical Rationalism.

1. Takeuchi said that egoistic individualism, not methodological individualism, is an enemy within the open society. Popper raised his hand and said that he had already written that there are some enemies within the open society in his book. he asked a question: Is your paper a friendly criticism or a hostile criticism in friendly disguise? Takeuchi tried to dodge the question and spoke long sentences. Popper stopped him and asked: Answer yes or no. Takeuchi answered that my paper is not a criticism at all.

I was impressed Popper's energy and his confidence in his theory. But I felt that his way of arguing is not in the spirit of critical rationalism. I think Takeuchi's paper raises a problem how is it possible to build an open society by fighting the enemies within, though I think his analysis of individualism has some flaws. I also think the social, political situation now is considerably changed

from the time when Popper's book was written. Therefore, new problems, which Popper did not expect at that time, have been produced. I think that Takeuchi wanted to explain it. It seems to me that it is unimportant whether criticism is friendly or hostile. For me learning is important. Popper aims at winning the debate. I think that in discussions it is unimportant to win or to lose. Their conversation is regrettable.

2. Kamino defends Popper's critical rationalism. Kamino pointed out that Bartley's questioning of Popper's critical rationalism is right but his solution is refuted by Watkins and Post. He tried to defend Popper's critical rationalism by his way which I could not understand. Popper said that Kamino's paper was extremely good. Popper added that he should have emphasized critical rationalism is not a theory nor a thesis but an attitude. And he said that he is not a fideist, because fideism is a philosophical position that the truth or falsity of statements is nothing but a faith, and he is against this fideism. I feel Popper's emphasis on attitude is in a sense right but the emphasis on attitude too much may produce a problem of objectivity.

3. Takashima said that Popper's falsificationism raised a question: how can we recognize progress between the two theories both of which are incompatible and false? Popper did not solve this question by means of his theory of verisimilitude and of corroboration. His evolutionary theory is not successful. He made a pessimistic conclusion that scientific activity may be a Sisyphus. Popper commented: You are very skeptic but I have an idea of metaphysical realism, though metaphysical realism cannot save skepticism completely.

4. Kogawara used the word "fideistic tendency." Popper asked him whether he writes in his book, *The Open Society*, that there is a limitation in criticism. Kogawara replied "No".

Incidentally, Popper told us the story between Popper and Bartley. He was quite excited. His assertions are as follows:

1. Why did Popper try to make their discussions private, not public? In order not to make their enemies strong.

2. Popper corrected sentences in his book, but Bartley was not content with his corrections.

3. Bartley did say that Popper's demarcation problem is unimportant. He thought it is important and Kant also thought so. Bartley did not say Popper's criterion is false. Therefore, it was not a criticism, then their discussions were not worthwhile making public.

4. He stressed that recently they were good friends until Bartley's unfortunate sudden death.

5. Popper said Bartley's comprehensively critical rationalism was too abstract and theoretical. But critical rationalism is an attitude and moral, therefore it must be concrete and practical. I think Popper admits that critical rationalism is different from comprehensively critical rationalism.

I am looking forward to your reply. Sincerely yours,

Kiichi Tachibana

アガシの返信

November 27, 1992

Dear Kiichi Tachibana:

Thank you for your interesting letter. I think 'may' and 'might' can be taken as synonymous unless there is an objection to this that should be taken into account. I will not answer your question on support as I said too much about the inductivist theory of support, of Whewell's, Popper's and mine.

Yes, Popper's energy and directness and force are lovely and his impatience is intolerant and regrettable.

I think Popper says in his monumental The Open Society that one must try to fight democratically and when one has to fight with force one may do so but after admitting some measure of defeat.

The new problems not discussed in Popper's book come from his monism and today's pluralism. When it was realized that monism contributed to Auschwitz, pluralism came in. Popper never said, I was once a monist and now a pluralist. I therefore think he cannot make a new contribution beyond his Open Society.

Bartley's solution is not refuted by Watkins. Nor by Post. If he ill refuted, I am the one who did it, and my argument (on the Tu Quoque) was never noticed.

Popper's Open Society Chapter 24 is a fideist rationalist, like Max Weber. You say he now says it is an attitude. The Open Society does not say so. Attitudes occur there in Chapter 25, not 24. I do not know what sentence Bartley made Popper correct in the Open Society. Do you?

The question, how do we recognize progress? is good. Many years ago I wrote on this question and my essay will come out soon, at last.

Popper's assertion that criticism should not be made openly is, as you say regrettable. It makes him leave the stage where criticism takes place, as criticism only counts if and when it is public.

Popper was forgiven by Bartley, mainly for practical reasons, not for moral ones. I see them as enemies to the last in truce, but in belligerence, not in peace, certainly not in friendship.

Bartley never said Popper's demarcation is false; I said that. Bartley never said the problem is unimportant; he said, Popper made it less important by showing that behind it stands the problem of rationality. This is very valiant and friendly, not hostile: yet Popper said and still says it is hostile.

Popper is right saying Bartley's rationalism is too abstract. So is Popper. This is my critique of both in the essay I already mentioned. Greetings to you and Makoto Kogawara and thanks for the information.

Yours sincerely,
Joseph Agassi
Professor in Philosophy

JA:mc

ポパー推薦文より

嶋津 格

自分のフロッピーの中を見ていて、京都賞にポパーを推薦する際に書いた文章を見つけた。少々手抜きかもしれないが、このようなものにも何らかの意義を見出して下さる方もあろうか（それとも編集担当の特権または窮余の策？）と考えて、ここに載せさせて戴きます。

* * *

ポパーの代表的著作／

① *The Logic of Scientific Discovery*, 1968(1959), Harper & Row

② *Objective Knowledge*, 1972, Oxford UP

ポパーの研究分野は多岐にわたるが、その中心は知識論であると、私は考える。上記の①と②は、いわゆる科学哲学上の画期的業績であって、①はポパー思想の出発点の内容を示し、②はその後の発展方向を示す。

①は、1930年代に *Logik der Forschung* として独語で出版された本を加筆し英語で出版されたものである。その哲学上の重要性は何よりも、帰納論理の有効性を全面的に否定した点と、厳密な意味での科学理論の真理性の証明または「検証 (verification)」の一般的な不可能性を論証した点、そしてそれらに依存しない形で科学を非科学と区別する基準を打ち立てたこと、にある。この区別の文脈で「反証可能性」の概念が打ち出された。その意義は必ずしも広く正確に理解されたとは言えず、不当な単純化を受けることが多いが、現在においても、科学と非科学または似非科学を区別しようとするなら、この概念の助けを借りねばならない、と考える理論家が多いのではなからうか。

①のメッセージは、いかに経験や実験によって確かめられた理論といえども、論理的には誤りの可能性をもつ、または、それと矛盾するよりよい理論の登場の可能性を前もって否定でき

ない、ということにあった。ここから、「批判」の重要性が導かれ、科学の特質は批判の許容にあるとされた。そして、批判に耐えて残った仮説群として、その時々科学的知識が理解された。②は、このような考え方を先に進めることで、その一つの理論的帰結を示すものである。

上記のように理解された科学を構成している個々の理論は、あたかも生物が淘汰に晒されて進化してきたのと同じような、進化論的過程によって生み出され、その過程の中にとどまるものと考えられる。それは、それを生み出した個々の科学者の主観から独立して、言語の世界の中で客観化され、他の理論と矛盾したり反証されたり更に進んだ理論を生み出す契機になったりする。理論の世界の中で個々の仮説が迎える運命やその意義は、それを生み出す者の理解を越えているのである。それは、物理的世界（世界1）とも人の心理（世界2）とも区別されるべき、理論の意味の相互関連の世界（世界3）の出来事なのである。

こうして、科学の「客観性」が、その限度で擁護されるのである。

* * *

ポパーの学問的貢献／

前欄記載のように、科学哲学におけるポパーの貢献は偉大であって、たとえ彼の主張の全部に賛成しなくとも、それを無視して今日の科学哲学を語ることは、到底できない。現代の科学哲学を担うポパーの次の世代の代表的理論家達であるクーン、ラカトシュ、ファイヤアーベント、パートレイらはいずれも、「反証」のあり方など個々の論点ではポパーと激しく論争してきた。そしてそれらの論争の中で、ポパー理論の弱点もかなり明らかになってきた、と私は考える。しかしそれはまさに、すべての理論が批判に晒されることを要求するポパーの立場が自己自身に適用されていると考えるべきであって、彼の哲学理論があらゆる批判から免れた論理的

に反証不可能な似非理論でなかったことの表れである。そしてそれ以上に重要なことは、これから次の世代による科学の自己理解への接近が、主にポパーの問題設定に大きく依存しているという点である。つまり、ギリシャ以来求められてきた、憶見と截然と区別されるようなエピステーメを、その獲得の場面において確実に得る特権的方法などないのだという認識を前提とすること。それにもかかわらず何故科学が、現在そうあるような驚くべき知的成果を、他の学問分野と異なって急速かつ累積的に拡大させることが可能であったかを考え、それがいかなる点で他の人間の類似の知的営みと異なるか、または異ならないか、を追求する、というような点である。

ポパーの科学論は、その系として、他の理論分野にも大きな影響を与えうるものである。その重要な一部は、彼自身の*Open Society and its Enemies*(1945)に示されており、ポパーの業績として、この本における政治・社会哲学および思想史のそれの方が、科学哲学プロパーでの業績よりも重要だ、と考えることすら可能であろう。前記のように、不可謬の真知の存在を認めないポパー理論から見れば、その存在と、政治的支配者によるその所有を前提とするような「哲人支配」の思想は、批判による知の発展を押し留める「閉じた社会」の思想と見なされる。これに対して「開かれた社会」は、常に批判とそれによる知的発展に対して開かれた構造をもち、それ故、将来の人間の知的成果が予め予測できない以上、それと相関する社会の「歴史的発展法則」もまた、予測不能であるとする。プラトンとヘーゲルとマルクスを批判するこの本は、ナチス・ドイツやスターリン時代のソ連を批判するための大きな概念上の枠組みを提供するものであっただけでなく、社会主義諸国の崩壊という現代の状況の下で、我々が迫られている新たな政治哲学構築の試みに対しても、大きな示唆をあたえ続けている。つまりここで打ち出されているのは、思想史理解につい

ての一つの有力なグランド・セオリーであるだけでなく、人間の知的発展のあり方に対する深い理解を論拠とする強力な民主主義擁護論でもあるのである。

確かに、専門哲学者の間でのポパーの評価は、大きく分かれており、特に日本では、ポパーの価値を認めない専門家も多い。それには幾つかの理由があるだろうが、私はこの原因の一端は、ポパー哲学の一見した限りでの平易さにあると考える。ポパーの場合、深遠で難解な文章を読み解くという作業を、読者に課すことは全くない。むしろその種の晦渋な教説が、反証から自己を免疫することで表見上の揺るぎない権威を手に行っているのでは、という疑いをもってそれらに接することが、ポパー理論の要請である。平易簡明な文章は、それが誤っている場合に簡単にそれと分かりやすい。いかなる場合にその説は誤りだと分かるのか。それが明らかでないなら、その説は積極的に「経験内容」に乏しいのだ、とポパーは言う。彼はこのようにして、誤りに対して可能な限り開かれた形で哲学を語ることを、自らの思想的インテグリティををかけて実践するとともに、同じことを他にも要求しているのである。それ故、もし京都賞がポパーに対して与えられるならば、それは、その思想的業績に対するものであるとともに、この種の彼のアプローチまたは哲学の姿を高く評価することを、内外に宣言することにもなると思われる。それは同時に、京都賞の権威を高めることにも資する、と考える次第である。

ポパー・レター (通巻8号1993年5月発行)
発行人 碧海純一
発行 日本ポパー哲学研究会 事務局
〒108 東京都港区三田 2-15-45
慶応義塾大学法学部 萩原研究室
TEL 03-3453-4511ex3314 FAX 03-3798-7480
編集部 〒263 千葉県稲毛区弥生町 1-33
千葉大学法経学部 嶋津研究室
TEL 043-251-1111ex3605 FAX 043-254-0497